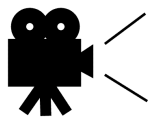




2009 年
会報 冬号

No.25

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

会員の皆様、あけましておめでとうございます。

今年とはどんな素敵な映画との出会いが待っているのか。そしてどんなイベントで皆さんの笑顔や涙を共にできるのか。またどんな映画の音声ガイドづくりに関わり、悩まされるのか・・・(笑)。ワクワクとした1年の幕開けです。

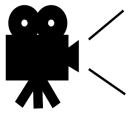
さて、では最初のビックニュースを2つお伝えしましょう。そうです。今年もやってきます。3月6日、7日の第1土曜・日曜は調布映画祭。そして4月29日(昭和の日)は第3回目となるシティライツ映画祭です。

おかげ様で、調布映画祭の方は、かれこれ8年も関わらせていただいておりますが、音声ガイドをつける3作品を選ぶのには、いつも頭を悩ませます。今年もとても悩んだ末、邦画は、梅毒と闘う誠実な青年医師の苦悩を描いた、若き黒澤明の意欲作「静かなる決闘」と、ホラー映画の巨匠、黒沢清監督が、現代日本の家族の崩壊と再生を描いた「トウキョウソナタ」の2本に決めました。「トウキョウソナタ」は第61回カンヌ国際映画祭、「ある視点」部門審査員賞や、「映画館大賞」という映画館スタッフが選ぶ、2008年に最もスクリーンで輝いた映画賞でも第5位にランクインした作品(ちなみに、1位は「ダークナイト」、2位は「ぐるりのこと」、3位は「おくりびと」、4位は「歩いて歩いても」)です。そして、洋画は少しわがままを言って、同行鑑賞会でも好評だった「グラン・トリノ」に決めました。この作品、イーストウッドの深い愛情とカッコ良さに完全に打ちのめされてしまいました。今年で80歳を迎えるとはとても思えない、あの鋭い眼光、あの風格!朝鮮戦争従軍経験を持つ気難しいアメリカ人が、アジア系移民一家との交流を通じて、偏見と戦い葛藤するという、人との交わりが変化をもたらす、とても素晴らしい作品だったので、是非、音声ガイドで詳しく感動をお伝えできたらいいなと思いました。お知らせのコーナーで、日時や申し込み方法など詳しくご案内しますので、是非、皆様、今から日程をあけて、ご来場に備えて下さいね。

それから、第3回シティライツ映画祭。こちらもやっと作品が決定しました。今年はテーマを「懐かしのあの映画をもう一度」と題して、洋画はミュージカル映画の金字塔『雨に唄えば』。邦画は山田洋次監督が渥美清さんの亡くなった翌年に、渥美さんに捧げる作品として、田舎の映画館を舞台にドラマを描いた感動作で、劇中に懐かしい名画の数々が登場する『虹をつかむ男』の2本です。こちらの準備状況は、実行委員長で会報編集委員のノンちゃんに熱く語っていただきます。

さて、年明けから、シティライツは2つの映画祭に向けて邁進します。忙しくなりますが、何をすることも皆さまのお力が必要です。得意なことがある方もない方も、是非力を貸してください。みんなで力をあわせて、映画の魅力をたくさんの人々に伝えましょう。そして、素晴らしい作品に出会えた喜びを共に実感していただけたら嬉しいです。

先日、ある人と改めて「バリアフリー上映活動とは何か?」について話しあっていました。「これは-(マイナス)を0(ゼロ)にするだけの活動ではないよね。-(マイナス)とか0(ゼロ)とかいう概念自体を取り払おうという活動なんだよね・・・」と。つまり、晴眼者のできることを0の基準として、映像が見えない視覚障害者を一と捕まえ、一を0にしたり、0に近づけようとする活動ではなくて、晴眼者のできることを0基準としていること事態がおかしいのだということ、音声ガイドに取り組んだりしながら、一緒に交わる中で、いつのまにか理解し、0を基準とした座標を外れたところの楽しさに向かっている。結果、0を基準とする健常者中心社会めいた風潮に意義を唱えるような活動をしているのかもしれない。だから、バリアフリー=バリアをなくす。という言葉は、視覚障害者の見えないというバリアにかかっているのではなくて、健常者に近づこう、近づけようとする社会を覆うバリアをなくす、という意味で使うべきなのかもしれないね・・・と。ちょっと難しいお話になってしまいましたが、とにかく参加してみればわかります。シティライツにはいろいろな発見があるはずです。



活動報告

このコーナーでは、10月～12月までに開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・10月11日/サマーウォーズ/新宿バルト9
- ・10月17日/私の中のあなた/川崎チネチッタ
- ・10月25日/さまよう刃/丸の内TOEI2
- ・11月7日/沈まぬ太陽/ユナイテッドシネマ としまえん
- ・11月21日/風が強く吹いている/ユナイテッドシネマ としまえん
- ・11月29日/RISE UP(ライズアップ)/渋谷ユロススペース
- ・12月6日/ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない/ユナイテッドシネマ としまえん
- ・12月19日/命の山河 日本の青空II/新宿武蔵野館
- ・12月26日/カールじいさんの空飛ぶ家/ユナイテッドシネマ としまえん
- ・12月27日/大怪獣バトル ウルトラ銀河伝説 THE MOVIE/新宿武蔵野館

同行鑑賞会レポート

尽きない魅力「沈まぬ太陽」

(豊田かおる)

「沈まぬ太陽の企画が成立しました」と、もりかなさんから連絡があった時、私は原作の第4巻を読んでいました。嬉しいと同時に、深く考えもせずにこの壮大な物語のガイドを引き受けてしまったことに、かなり焦りも感じていました。果たして、公開日に観た映画は想像を超えており、力不足とは分かっているけど是非ガイドをさせて欲しい。この作品の素晴らしさを一人でも多くの方に届けたい」と心から願わずにはいられませんでした。

ガイドを作成する上で心がけたことは、練られた台詞と沈黙を大切に観客の皆さんに届けることでした。そのためにもいつもより数回多く劇場に通いましたが、その主な作業は書き上げたガイド原稿を削ることでした。日本を代表する役者達の演技は、表情や動作までも伝わる迫りに満ちていたからです。結果としてそれが正しかったかは今でも分かりませんが、数人の方に私の意図したところを褒めていただいた時は涙が出るほど嬉しかったです。

鑑賞会が終わって1ヵ月を経た今でも、サントラ盤を聴いていると映画の感動が蘇り、胸が熱くなります。このまま器材とラジオを担いで各地の劇場を回り、皆様にこの映画をお届けしたいくらい、「沈まぬ太陽」は魅力に溢れています。

しかし、ガイドの依頼をいただかなかっただら、私は原作はおろか、劇場での鑑賞もしていなかったかもしれません。この企画にお声を掛けてくださったもりかなさん。推進室始め、ボランティアスタッフの方々、そして会場に足を運んでくださった皆様に心から感謝しています。

今後は、コミカルな作品やモノログ風なガイドにも挑戦してみたいと思っています。またお声掛けいただけましたら幸いです。

『沈まぬ太陽』 監督:若松節朗 出演:渡辺謙、三浦友和、松雪泰子 ほか

(あらすじ)国民航空の労働組合委員長・恩地(渡辺謙)は職場環境の改善に奔走した結果、海外勤務を命じられてしまう。10年におよぶ孤独な生活に耐え、本社復帰を果たすもジャンボ機墜落事故が起き、救援隊として現地に行った彼はさまざまな悲劇を目の当たりにする。そして、組織の建て直しを図るべく就任した国見新会長(石坂浩二)のもとで、恩地は会社の腐敗と闘うが……。

(シネマトゥデイ)

「RISE UP」

(小山田早苗)

「RISE UP」は、十代の男の子と女の子が主役の、爽やかな青春ストーリー。“あの頃”の、もどかしくも初々しい気持ちを思い出さ

せてくれる映画でした。青春が遠くなってしまった私にとっては正直、初めて観た時に、特に感情移入する場面はありませんでしたが、ガイド制作が進み何度も映画を観るにつれて、どんどん気持ちが入っていきました。勉強会で、

「ルイは本当はいい子なんだよ」

「ルイも航のことが好きなんだよ、だから苦しいんだよ」

「ごめん、っていうのは、こんなことしかできなくてごめん、って意味だよ」

と彼等の心の声を代弁しては、メンバーに、気持ち入り過ぎ！と諭されました。

こんなに感情移入してしまうとは… 自分でも意外です。

録音は、によこさん、リーダー、私、そして中島監督も立ち合って、11月4日に行われました。ナレーターのによこさんが、「真夏の夜の夢」の時と同様に、徹夜で原稿を読み込んでくれたので、録音がスムーズに運ぶこと運ぶこと。尺もタイミングもバッチリでした。さすがプロ！脱帽です。

編集で一番苦労したのは、音量です。今回はスピーカーから流れるオープン形式だったので、本編音量とのバランスの取り方に悩みました。映画館の音量ボリュームに近づくために、スピーカーをガンガン鳴らしながら調整したのですが、どうだったでしょうか。感想をお聞かせいただけると嬉しいです。

上映には、中島監督とスターダストピクチャーズの方もいらっしゃっていました。バリアフリー上映に積極的に関わってくださって、本当に嬉しく思います。そして一番のサプライズ！エンドロールに、音声ガイド制作者全員の名前が出たのです。監督が編集し直してくださったそうですよ。実はクレジットに載ることが夢だった私…感激です。ありがとうございました。

最後に。余談ですが、ルイが持っているカメラは、コンタックスのG1という高価なものだそうです。上映後のお茶会で判明しました。ボディはチタンゴールドというタイプ。監督が自費で買ったそうです。叩き付けて壊すシーンは、さぞお辛かったことでしょうか。カメラ小僧の知人と、映像のプロの監督の会話は、チンプンカンプンでしたが、とても楽しそうでした。

中島監督の次回作は、来年の今頃から再来年にかけての公開になるそうです。今度はどんな作品でしょう、楽しみです。中島監督、応援しています！

『RISE UP ライズアップ』 監督：中島 良 出演：林遣都、山下リオ、太賀 ほか

(あらすじ)ひき逃げ事故で失明してしまった少女ルイ(山下リオ)。そのショックから立ち直れず、わがままな日々を過ごすルイは、ある日、パラグライダーに熱中する高校生・航(林遣都)と出会う。滅多に発生しない強力な上昇気流“ライオン”に乗れば、自分は成長できると信じる航に、ルイは次第に心を開いていくが……。(シネマトゥデイ)



第3回シティライツ映画祭委員長より檄文！

皆様こんにちは！毎度お邪魔いたします。シティライツ映画祭実行委員長のノンちゃんです。いよいよ年もあけ、準備も着々と進みつつある第3回映画祭について少し書かせていただきます。

第1回はまさしく無我夢中で当日を向かえ、第2回もまた様々な新しい課題をクリアしつつあつという間に向かえ、そして第3回。皆さんにとっては少しばかりマンネリ化してきているかもしれないあと不安に思う今日この頃です。でも、中心になって準備をする実行委員は何度経験しても分からないこと満載で試行錯誤の連続です。マニュアル通りには行かないのがイベントづくりの苦勞であり、楽しみでもあるんですよね。そんな舞台裏をちょっぴりご紹介いたします。

まずは会場が決まらなければ始まりません。私たちでも使用料に手が届きそうなレベルとなるとやはり公共のホールということになります。このホールの申し込みをしたい団体はとて多く、すごい倍率の抽選となり、籤運の強さが求められることになります。また、映画を上映する設備として35ミリ映写機などを備えているホールも意外に少なかったり、交通の便や駅からのアクセスなどを考慮して行くとしても数が限られてしまうというのも実情です。そんな中で、両国のホールが2回続けてGETできたのは本当にラッキーなことでした。

会場決定の後に続く難問は言わずと知れた上映作品選びです。まずは実行委員が「これぞ！」と自信を持ってお勧めできなけれ

ば成功には繋がらないでしょう。とは言え、山ほどある映画の中からそれを探し出すのは容易なことではありません。今年の夏も実行委員は暑さに負けずに頭をひねりました。秋の入り口に差し掛かったころまで考え込んでいたのですが、やはりここは皆さんのお知恵も少しお借りしようという案が浮上。上映する2作品の内、1本は「懐かしの名画」を投票で選んでいただくということになりました。

ところが、懐かしの名画と一口に言っても様々。懐かしいというのに相応しいのは何年くらい前までか？あまりにも長すぎる作品は映画祭には不向きでは？シリーズ物の1本というのは分かりにくい？見終わった後にどよんとする作品やホラーなんかは嫌われるかも？などなど悩みになやんで投票にかけたのが18本。どれも1度は観てみたい作品と言える一方、なんであの作品は18本の中に入っていないのかしら？と思われる作品もたくさんあったのではないかと思います。そんな中でもありがたいことに100通ほどの投票メールをいただき、どれが1位になるかとドキドキしながら集計作業を行うことができました。そして決定したのが「雨に唄えば」。とても楽しい作品でわくわくしますが、ミュージカル作品は音声ガイドの難易度が高いという側面もあります。とは言え、難しければ燃えるというのがシティ・ライツ！？お客様の笑顔を思い描きながら、声優ボランティア・ガイド製作ボランティア・実行委員一丸となつてがんばります！

そう、今回の映画祭では映画館運営の原点。お客様の笑顔をたくさんたくさん生み出すことを目指します。見えなくなってあきらめていた名画の鑑賞がかなった人の笑顔、久しぶりに多くの人と一緒に大好きな映画が観られた人の笑顔、軽やかなダンスシーンで思わずステップを踏みたくなくてこぼれる笑顔……。いろ～んな世代の男女も障碍の有無も関係なくみんなで楽しめる空間を改めて実感していただきたい と思います。邦画の上映作品「虹をつかむ男」に登場するオデオン座はまさにそんな空間を表現した素敵な作品の一つではないかと考えて選んだものです。皆が喜ぶ顔が見たくて一生懸命に上映作品を考える館主がいて、選定会議では思わず熱い語り止まらなくなったり、終了時間の規則に固執する役場の人を力づくで説得にかかったり、たった一人のために出張映写に出向いたり……。ちょっと忘れかけていた懐かしい日本を思い出していただける作品。そして、なんとなくシティ・ライツの私たちにも似ているような、いないような……。そんな気持ちにもなるのは私だけではないと思うのですがさていかがでしょうか？

4月29日が素敵な日となるよう会員の皆さんの応援もどうぞ宜しくお願いいたします



特集

映画祭をめぐる～ベルリン映画祭を知ろう～

前回から始まった世界の映画祭を紹介するコーナー。今回はベネチア映画祭に関する紹介でしたが、今回も入門編第2段、3大映画祭のひとつ、ベルリン国際映画祭をレポートします。

<概要>(ウィキペディアより)

1951年に映画史家であるアルフレッド・パウアーをディレクターに開催されたのが起り。第二次世界大戦前に芸術の都として栄えたベルリンの西側の拠点であり、東側の中にある当時の西ベルリンにて西側の芸術文化をアピールしたいという政治的意図があったとされる。1955年にFIAPF(国際映画製作者連盟)に公式に認められた。当初は西側のみであり、1974年にソ連が参加するまで東側の作品は除かれていた。パウアーの引退後、1976年にヴィルフ・ドナーが第2代のディレクターに就任する。ドナーは夏開催であった本映画祭を2月開催に変更した。1980年に第3代ディレクターとしてモリッツ・デ・ハデルンが就任する。ハデルンはハリウッド映画に重点をおくセレクションを映画祭にもたらした。1994年には、映画にも及んだGATTの貿易対立で、アメリカ側が映画祭をボイコットする騒ぎとなり、ハリウッド重視の方針により大きな影響を受けた。2000年にハデルンはディレクターを解任を宣告され、2001年で退任。2002年からはディーター・コスリックが第4代ディレクターとなっている。

他の映画祭と比べると社会派の作品が集まる傾向がある。また、近年は新人監督の発掘に力を注いでいる。

最高賞は作品賞にあたる金熊賞。この賞の名は熊がベルリン市の紋章であることによる。

他に、審査員グランプリ、男優・女優賞、監督賞、音楽賞、芸術貢献賞、アルフレッド・パウアー賞、初監督作品賞

因みに、日本映画の受賞作は次のとおり

1963年 - 今井正監督『武士道残酷物語』が、金熊賞を受賞

1963年 - 今村昌平監督『にっぽん昆虫記』で、左幸子が主演女優賞を受賞

1975年 - 熊井啓監督『サンダカン八番娼館 望郷』で、田中絹代が主演女優賞を受賞

2002年 - 宮崎駿監督『千と千尋の神隠し』が、金熊賞を受賞

<補足>

ドイツというと世界大戦の敗北や、ナチスドイツによる人民虐殺など暗い歴史に覆われていますが、ベートーベンをはじめとする音楽的巨人や、トーマス・マン、ゲーテに代表される文豪が数多く存在し、芸術文化の豊かな国です。そのあたりに惹かれて、ぜんぜん身につけませんでしたが第2外国語はドイツ語を取っていました。また、ドイツ映画もよく見ます。ドイツ映画というとナチものや、東西冷戦を扱ったものが多く、どうしても政治的・社会派作品をイメージしてしまいます。<概要>に当映画祭の歴史を述べてきましたが、やはり政治的なカラーを帯びたものだったのだなとしみじみ感じます。

今年(届くころは去年)は、ベルリンの壁が崩れて20周年。NHKスペシャルで特別番組で、(ベルリンの壁についてはほとんど知らない)東ドイツ出身の21歳の学生がこのように語っていました「西ドイツは豊かな国と聞いていたけれど、こんなにホームレスがいるとは思わなかった…。資本主義を極め、東側に対して 豊かさをうたっていたはずのアメリカを中心とした西側の国々の現状、そして資本主義の正体というものを見た気がしました。映画祭を特集してみて、改めてドイツを政治的色眼鏡で見てしまう自分がいました…。

(吉川 俊平)



勝手におすすめシネマ Vol.11 『赤ひげ』

2010年は巨匠・黒澤明の生誕100周年記念イヤーです。

『七人の侍』、『用心棒』、『天国と地獄』などなど、素晴らしい作品が多数ありますが、今回はその中から『赤ひげ』を紹介いたします。

『赤ひげ』(1965年)

監督:黒澤明 出演:三船敏郎、加山雄三、他

ヴェネチア国際映画祭サン・ジョルジュ賞、最優秀男優賞受賞

長崎遊学から帰ってきたばかりの保本(加山雄三)は、幕府の医学機関への出仕が約束されていたにも関わらず、知らぬ間に小石川養生所の医師として働くという段取りをつけられていたことに納得がいかない。養生所の責任者である“赤ひげ”(三船敏郎)に反発し、まったく仕事をせずに居座りはじめるのだが……。

“赤ひげ”と向き合い、患者と向き合う中で、保本は自分の進むべき道を見つけるのだった。

私が今回『赤ひげ』をおすすめする理由はというと、実は、女優・杉村春子の素晴らしさを観てほしいからなんです。

本作品でも、例のごとく憎まれ役を演じているのですが、まあ、実に素晴らしい!

劇場に本作品を観に行ったときのこと。彼女が初めて登場した場面で、会場の空気が一瞬ざわついたんです。「待ってました」とばかりに笑い声やうなり声が起るんです。ちなみに、小津安二郎監督の『秋刀魚の味』(1962年)を観に行ったときにも、まったく同じ状況を目の当たりにしました。それ以来、私は「杉村春子の右に出る女優はいない」と思っています。

映画館で映画を観ているとき、作品から受ける感動である種の一体感を感じたことはありませんか?おそらくそれが、映画を観る上での最も幸せな時間なんです。

女優・杉村春子は、あきらかにその一体感の源となっています。彼女を観たいという張り詰めた緊張感、そして登場したとき一気に弾ける高揚感。それらが劇場に居合わせた観客を一つにする。本当に素晴らしく幸せな瞬間です。

銀幕の中で生々しく‘生きて’いる杉村春子の女優魂を観たとき、映画が好きでよかったと心から感じました。

というわけで、そんな気分を皆さんにお裾分けしてみました。



思い出の映画

— 思い出は、名画とともにいつまでも —

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

音声ガイド付き映画との出会い

(小川明美)

もう何年前のことになるのかさえ思い出せない私ですが、やっとパソコンのアポロキーを利用し、点字入力しまちがえながらもメール交換を始めたのは2000年の春でした。

それなのになかなか上達もしないし、他のこともできないままに過ごしています。そんな私に遠く離れてる盲学校時代の友達から、映画に音声ガイドを付けてくれるボランティアグループのメーリングリストがあることを教えてもらえました。見えなくなっただけで映画を見に行くこともなく、テレビの音声ガイド付きサスペンスドラマだけをたのしんでいました。このメーリングリストはいろんな映画を教えてくださいました。私が最初にガイド付きの洋画を見聞いたのは「風とともにさりぬ」でした。これまで洋画には縁のなかった私には驚くような場面が何度かありました。それからは名古屋でも音声ガイド付き上映会がおこなわれることを教えてもらい出掛けました。盲目の先生が中学校の教師をしながらパラリンピックに出場するという熱血先生のお話「夢追いかけて」でした。これが見えなくなって初めて映画館で映画をたのしんだスタートとなりました。北野監督の「座頭市」、名古屋でおこなわれた福祉映画祭IN名古屋「刑務所の中」なども見に連れて行ってもらいました。「博士の愛した数式」もガイドヘルパーさんと名古屋の映画館まで行きました。「西の魔女が死んだ」では家と鶏小屋・イチゴ畑などの配置などを点図で教えてもらえました。その時はラジオもお借りしました。そのラジオは全てセットされ安心し座席にゆったり座りたのしませてもらいました。このCLCCから音声ガイド付きの映画界やDVDの販売・テレビ放映などを教えてもらえるようになり、その解説・事後解説メールを聞かせてもらえることを嬉しく思っております。ガイドヘルパーさんや友達と供に名古屋まで出掛けると、特急を利用して乗車時間だけでも2時間余りかかります。チョットした旅行気分でのしめるのですがなかなか出掛けられないのです。今ではCLCCがCLCCとなり、またたくさんのグループに分かれていろんな情報を届けてもらえるようになりました。

直接映画を見られない時は原作本を聞いたり、解説メールを聞いてたのしんでいます。箱根駅伝の「風邪が強く吹いている」も直接映画は見に行けませんでした。原作本を聞いてたのしみです。なかなか上映会には参加できない私ですが皆様からの映画情報をたのしみにしています。このようにたくさんの映画やDVD・テレビドラマの解説メールや情報を田舎に住んでいても、中央に住んでいる皆様達と同じように知らせてもらえることを嬉しく思っております。これからもどうぞよろしくお願い致します。



お知らせ

■ 新規会員のご紹介

(2009年10月15日～2009年12月31日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員] ・加藤新造(千葉県旭市在住)

[賛助会員] ・小野順子(大分県別府市在住)

■ 音声ガイド付き上映会のお知らせ【調布シネサロン】

東京都調布市で行われる音声ガイド付き上映会のお知らせです。

2月9日(火曜日)、昨年10月享年76歳でお亡くなりになった南田洋子さんの代表作「豚と軍艦」が、音声ガイド付きで上映されます。『うなぎ』でベルリン国際映画祭グランプリに輝いた巨匠・今村昌平監督が、戦後の安保体制の下、混迷しながら欲望の道へと突き進む日本人の姿を基地ヤクザにたとえ、痛切に批判した社会派ドラマです。是非、ご来場下さい。

【調布シネサロン】

日時:2月9日(火曜日) 場所:調布市グリーンホール

(京王線調布駅中央口よりすぐ。※南側階段をおりて右手の建物です。)

上映開始:11時~と15時~の2回。(音声ガイド付き)

各回 30 分前開場

鑑賞料:無料

主催:調布市文化・コミュニティ振興財団 協力:シティ・ライツ

※音声ガイドをお聞きになる方は、FM ラジオをご持参ください。

周波数 FM88.5MHz で音声ガイドをお聞きになれます。(当日受付にてラジオの貸出もあります。)

※いらっしゃる方は、シティ・ライツ事務局までご一報いただけると嬉しいです。調布駅からの誘導をご希望の方も、駅からご案内いたしますので、ご連絡ください。

■調布映画祭2010 音声ガイド付き上映作品決定!

今年も 3 月に開催される調布映画祭で、シティ・ライツが音声ガイドに協力します。1年に1度のお祭りですので、シティ・ライツのボランティアスタッフ一同も、年末からガイドづくりに向けて、総力をあげて取り組んでいます。是非、ご期待ください。

下記のとおり、日程と作品が決定いたしましたので、ご案内いたします。

上映時間やお申し込みについての詳細は、追ってメールリスト等でお知らせします。

メールをお使いでない方は、2月20日過ぎにシティ・ライツ事務局まで、お電話でお問い合わせください。

★3月6日(土) 15:50~17:47 会場:調布市グリーンホール 大ホール(定員 800 名)

『グラン・トリノ』 2007 年/アニメ映画/117 分

監督 クリント・イーストウッド/出演 クリント・イーストウッド ビー・ヴァン ブライアン・ヘイリーほか

(あらすじ) 妻に先立たれ、息子たちとも疎遠な元軍人のウォルト(クリント・イーストウッド)は、自動車工の仕事を引退して以来単調な生活を送っていた。そんなある日、愛車グラン・トリノが盗まれそうになったことをきっかけに、アジア系移民の少年タオ(ビー・ヴァン)と知り合う。やがて二人の間に芽生えた友情は、それぞれの人生を大きく変えていく。

朝鮮戦争従軍経験を持つ気難しい主人公が、近所に引っ越してきたアジア系移民一家との交流を通して、自身の偏見に直面し葛藤(かっとう)する姿を描く。

★ 3月7日(日) 10:20~11:54 会場:調布市文化会館たづくり 2F くすのきホール

『静かなる決闘』 1949 年/日本映画/94 分

監督:黒澤 明 出演:三船敏郎、三條美紀、志村喬、植村謙二郎、千石規子ほか

(あらすじ)前線の野戦病院で次々と運ばれてくる負傷兵を必死に治療する軍医・藤崎。彼はふとした不注意から手術中に小指にキズをつくってしまい、そこから梅毒に感染してしまう。藤崎は誰にも打ち明けることなく、秘かにサルバルサンの注射を打ち続けるが大した効果はなかった。復員後、藤崎は恋人の美佐緒にも病気を隠し続け、次第に彼女を避けるようになるのだった……。

若き黒澤が東宝を離れて他社で監督した記念すべき作品。愛と性、善と悪という大きなテーマを斬新な映像と音響で描く若き黒澤の意欲作!

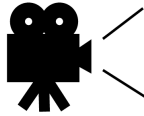
★ 3月7日(日) 12:35~14:34 会場:調布市文化会館たづくり 2F くすのきホール

『トウキョウソナタ』 2008 年/日本映画/119 分

監督:黒澤 清 出演:香川照之 小泉今日子 役所広司ほか

(あらすじ) 仕事に没頭する毎日を送っている平凡なサラリーマンの佐々木竜平(香川照之)は、ある日突然、長年勤め上げた会社からリストラを宣告されてしまう。一方、世の中に対して懐疑的な心を持っている長男・貴(小柳友)は家族から距離を置くようになり、一家のまとめ役だったはずの妻・恵(小泉今日子)にも異変が起き始めていた。

東京に暮らす、ごく普通の家族がたどる崩壊から再生までの道のりを、家族のきずなをテーマに見つめ直した人間ドラマ。



編集後記

(会報編集課 ノンちゃん)

記事の方でも書かせていただきましたが、第3回シティ・ライツ映画祭の準備は、あっちにぶつかり、こっちに転がり、ばたばたと進んでおります。これからまた皆さんにお願いをする場面もいろいろ出てくると思いますので、そのときは元気よく「は～い」と手を上げていただけると嬉しいです(笑)そうそう、お力を貸していた だきたいのは映画祭ばかりではありませんでした。この会報の編集や挿絵書きをお手伝いくださる方も大募集中です。一緒に楽しい紙面づくりをしてみませんか？お待ちしてま～す。

(会報編集課 大田)

年末になかなか治らない厄介な風邪を2回も引いてしまい、一月半も不快な日々を送っておりましたが、2010年、今年は健康でいられるでしょうか……。私、今年は何年(?)みたいなので、すでになんとなく自信がないのですが……。

でも、厄年とかそういうの、きっと神様は関係なく平等に幸せも分けてくれるはず！ 今年も良い年になりますように♪

(会報編集課 吉川)

みなさんこんにちは、さすがに寒くなってきましたね。これが届くころは新年ですから、もっと寒くなっていることでしょう。時期も時期ですし、ありきたりですが1映画ファンとして今年のベスト作品をあげてみたいと思います。上位から、母なる証明、グラントリノ、サマーウォーズ、チェンジリング、ベンジャミンバトンの数 奇な人生、シャンソニア劇場、私の中のあなたといったところです。母なる証明は唯一みた韓国映画でしたが、自分の中ではダントツでした。知的障害の息子を持つ母親が、女子高生殺人事件の容疑をかけられた息子の無実を晴らすべく奮闘するお話です。事件をといっていく過程はスリリングに描かれていて、また隠された暗い親子 関係というスパイスを交えながらもエンターテインメントとしてよく出来ていました。(見逃しているものも多いと思いますが)残念ながら邦画では印象に残ったものがほとんどありませんでした。来年は邦画の逆襲を期待しつつ、また素敵な作品との出会いを祈りながら、今年の映画鑑賞を閉めたいと思います。では、来年もまた お会いしましょう！！

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は2010年4月10日。投稿される方は、3月第2土曜日までお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2009年冬 2010年1月10日発行 編集:吉川 俊平、斉藤 恵子、大田 悠子
発行者:バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局:〒114-0016 東京都北区上中里1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995
E-mail mail@citylights01.org URL http://www.citylights01.org

